今月の
選者

吉岡利之

(丸善株式会社 教育・学術事業本部「丸善ライブラリーニュース」編集担当)

持続可能な知の生態系の片隅で

情報管理 54(2), 109-112, doi: 10.1241/johokanri.54.109 (<http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.54.109>)

趣味は、読書。

こう書くようになってから、はや30数年。しかし図書館向け広報紙の企画・編集に従事し、先達の足跡や業績にふれると、どのような展開を図るかについて思案に暮れることたびたびです。なかなか役に立つ読書にはなりません。休刊にならずに続けられているのは、幸い多くの図書館関係者に助けられている賜物だと思います。図書館が果たしてきた役割が、分野を限定せず、求められる、必要とする読者・研究者に資料を提供し続けてきた蓄積と整理にあるのと同じように、幅広く情報、知識、知見を縦覧、整理し提供できるような企画・編集について考えることがあります。そんな中で、気になる3冊をおすすめします。

『本は、これから』池澤夏樹編
岩波書店、2010年、861円（税込）

岩波新書新赤版として、電子書籍元年に発行されたタイムリーな企画新書。本のあり方から、本のこれからについてのエッセー集です。2010年が電子書籍元年として出版業界、電子書籍リーダーメーカー、書籍流通・書店業界に与えた影響は計り知れません。Kindle、iPadの登場によりにわかに、「本の未来」について新しいメディア対応のビジネスとして、多くを巻き込んで、新たな流通の覇権、電子書籍フォーマット、デジタル化、著作権処理、電子納本等さまざまな局面で賑わいを見せました。国内ではいまだ、

http://www.iwanami.co.jp/hensyu/sin/sin_kkn/kkn1011/sin_k557.html

携帯電話での電子書籍販売・購読が流通の大半を占める段階にも関わらず、高い頻度でメディアに取り上げられました。

その最中での本書の発行は、機を見るに敏以上に、企画・編集をする者にとって実に爽やかです。「良書が売れるのではなく、売れる本が良書である」がごとき幅広く読者を獲得しようとする状況において、この37名のエッセー集を刊行したことは、うれしい限りです。長らく出版不況と言われても、出版点数はウナギ登りで上がり続け、返本率も合わせて上昇し続け出版社にとっては自転車操業。書籍流通にとっては、メディアに取り上げられる電子書籍リーダー特集にばかり目が行って、「本はどうした」と言う声が聞こえたのでしょうか。

37名の筋金入りの本好きが、書き手として、送り手として、「本」という物質を電子書籍と比較し、依

然として本の読み方や、書店や図書館の役割も重要だとし、両者とも生き残るとするエッセーは、リアル本に関わる人たちへのエールです。

ハーバード大学図書館長ロバート・ダントン教授は、「昔の本の多くは独立した逸話の集まりで、まるでブログだ。一冊を最初から最後まで没頭して読むのが本来の読書だと考えるのはロマンチックすぎる」としながらも、「図書館員は、利用者が情報の海の中で必要な本にたどり着く手助けをする。多くの情報があるからこそ、質を見分ける専門家の必要性はより高まる。編集者、デザイナー、本屋など、本にかかわる文化的仲介人の力を私は深く信じる。優れた出版社は著者が書いた文章を「本」に仕上げ、読者に質の保証をしている」（朝日新聞、2011年3月7日、朝刊）とインタビューに答えています。

1996年の書籍出版のピークから右肩下がり、リーマンショック後の多数の雑誌の休刊等、日本の出版販売額の低落は著しいものがあります。代わりに、Kindle本体の売上実数は公表されていませんが、市場規模としても数千億のマーケットを生み出しています。電子書籍リーダーメーカー、メディア各社が参入することで、出版社・書籍流通の占有物でなくなることも視野に入れた「本は、これから」に取り組んでいくことになるでしょう。

『本を生みだす力ー学術出版の組織アイデンティティ』佐藤郁哉、芳賀学、山田真茂留
新曜社、2011年、5,040円（税込）

フィールドワークの技法を駆使し、学術図書出版の、大学業績評価システムや文化的側面と商業出版という経済活動の関係を浮き彫りにする一冊。研究者はもとより出版、書籍流通、図書館関係者におすすめます。人文学および社会科学の学術図書（モノグラフ）が、一般書籍と同様に、出版・流通・消費されることから、一定の経済規模を持ち、持続可能なシステムとして成立するための必要条件を洗い

<http://www.shin-yo-sha.co.jp/mokuroku/books/978-4-7885-1221-4.htm>

出しています。合わせて、学術研究の成果発表としての出版が、いかに学術コミュニケーションに寄与し、学術的知の生産と流通をより質の高いものにしていくかを考察する学術研究の成果報告書です。

本書のはじめに、「紙の本に匹敵するメディアは（今のところまだ）存在しない。そして、本というものにそのような特長があるからこそ、市場規模という点だけから見れば「矮小」とさえ言える出版産業を介して生み出されてきた数々の書籍が、時には社会を変革した歴史を動かしていく原動力になってきたのだと言えよう」と、本の果たしてきた学術成果公開の役割を確認し、学術的知のゲートキーパーについて調査・分析しています。「スカウト」・「パトロン」・「仲間」・「同志」・「プロデューサー」の顔を持ち、学術コミュニケーションに寄与しているのです。

しかし、編集に期待される門衛＝ゲートキーピングが、著者と編集者により形成されたにせよ、構造不況業種の出版業界に課する経済的負担は大きい。米国では国家などの支援、ファンド、企業の支援を研究者自身が積極的に獲得するシステムがありますが、日本には相応な存在は残念ながら僅かです（参考 科学研究費補助金研究成果公開促進費「学術図書」助成）。戦後好況時には、出版業界である程度のリスクを抱えつつ、教養としての読書等、旺盛な読者に支えられながら多くの出版が成さ

れました。今後、日本の教育行政・システムが自立し、研究分野での持続可能なシステムとの連動がない限り、学術図書の出版事情の混迷は続くでしょう。

学術研究に関わる大学・機関にとっては、学術コミュニティにおいて研究者らが原稿を読み合い、コメントやアドバイスを行う相互批評と扶助が研究者のバックグラウンドとして存在すると認識し実践されるディシプリンの変革が待たれます。

『社会学文献事典―書物の森のガイドブック』
見田宗介，上野千鶴子，内田隆三，佐藤健二，
吉見俊哉，大澤真幸編
弘文堂，1998年，15,750円（税込，版元品切）

<http://www.koubundou.co.jp/books/pages/55075.html>

3冊目として、社会学関係の研究学徒には必携の一冊をおすすめします。社会学の古典的な基本文献100冊，重要文献900冊を3,200字，800字に執筆者が要約・解説をまとめ，現代社会学のアクチュアルな問題意識を切り出し，26のテーマごとに文献年表，詳細な索引を提供した一冊です。

細分化する学問分野を俯瞰し，複層化した諸説，言説に重みづけを行いながらの作業は編者各位の知見・見識の協調的知的作業の到達点と見るべきものです。社会学に含まれる広範な各領域に目配せしながら文献を選定し，解説を文学・哲学・歴史学を専

執筆者略歴

吉岡 利之（よしおか としゆき）

丸善株式会社 教育・学術事業本部「ライブラリーニュース」編集担当。

1957年千葉県生まれ。1981年入社。教育市場（主に大学・公共図書館）に家具・設備の営業を担当。80年代より，新設大学・学部新增設を担当し，キャンパス計画，教育・研究支援の環境づくりに関わる。営業を中心に，企画・デザイン，コンサルティングを行う。2007年より「丸善ライブラリーニュース」の復刊，広報企画業務に従事。

昨年リフォーム時に，待望の書棚を設け，お披露目準備中。ブックログに読書履歴をUP (<http://booklog.jp/users/nextbook>)。

門とする方々を含め四百数十名に執筆いただくという離れ業に挑み，達成するということ自体に感銘するとともに，社会学に期待する時代に応えた研究者自らが編集に参加した本です。

当然，図書館にも収蔵され，レファレンスに活躍している資料ではありますが，ここに紹介するのは，その企画・編集の成果についてです。専門的な学問領域についての研究成果は，学術論文，学会発表等を経て学術図書（モノグラフ）等で出版されます。当然単著，共著が研究実績として評価されます。しかし研究者が，事典，辞書，教科書の編集・編纂に関わることで，研究業績評価はそれほど高いものとはいえません。近年統合領域の開拓，分野横断的な学際研究等その領域は拡大し，多くの研究者が出会い，議論する学術コミュニティの重要性は高まっています。複雑系研究やフューチャーセンター，学術界の集合的アイデンティティを結集させた業績は評価されているのではないかと思います。

『社会学文献事典－書物の森のガイドブック』は、多くの図書館に所蔵されています。一度手に取ってみてはいかがでしょうか。社会学に関する事典・辞書は、数多く出版され、各々編集・企画、執筆陣に特色があり、比べてみることで、社会学の姿も浮かび上がります。近刊、『社会学事典』（日本社会学会 社会学

事典刊行委員会編, 丸善, 2010年）もおすすめします。

本に関わる文化的仲介人の力として、ベストセラーの「もしドラ」以上に、構造不況である出版社、書籍流通や、図書館に関わる多くの方々に、持続可能な知の生態系の一員としてお役に立ちたいと思います。